

# Management Club Report

May.2003 / Vol.5

## Monthly Opinion 最強の歯科助手部隊の育成

### “予防の時代”到来

近年、歯科医療の潮流は「治療」から「予防」へと移り、伝統的な歯科医師の仕事で

あった「削って詰める」という作業は次第に隅の方に押しやられていくようになってきました。と同時に脚光を浴び始めた職種が歯科衛生士です。ともすれば脚光を浴び過ぎて、「歯科医師は開設管理者として存在すればよく、これからの歯科医院の現場は歯科衛生士が中心となって運営されるべきである」とか、「歯科医師は歯科衛生士の下請けとして存在するようになる」などと極論する向きも現れ、現に、大阪や東京ではそれに近い形の「歯科医院」が出現していると聞きました。

しかし、どうでしょうか。あまり行き過ぎた考え方は健全な発展を遂げられず、一時のブームとして終息する危険性をはらんでいると思います。予防の必要性とそれに伴う歯科衛生士の存在感は、今以上に高まることは間違いなしでしょうし、これからの歯科医院の発展には歯科衛生士の確保が必要不可欠の条件となってきたことも事実です。しかし、だからと言ってそのことが、治療そのものを否定することにはならないはずで

す。予防が徹底されることによって従来型の治療の「量」は減るかもしれませんが、人間の生活レベルの向上に伴い、健康への欲求は高まる一方になりますので、歯科治療そのものが衰退するようなことはあり得ません。むしろ咬み合わせ治療や口臭治療などを包含した、幅広い医療としての「口腔科」という存在に昇格していくことが想定されます。

時代の変化に合わせて歯科医療に対するニーズが変化することは当然です。健康に対する価値感が大きく拡大していくのも時代の進歩の表れです。そのような中で従来主流を占めてきた治療方法が見直され、新しい歯科医療のあり方が問われ始めると、これまで歯科医師の独り舞台であった歯科医療現場に、歯科衛生士が重要な役割を担って登場するようになってきたのです。

このことは歯科界にとって特筆すべき状況の現出であると言えます。予防の時代を迎えたという現象面ではなく、歯科医院がようやく“チーム”という概念に基づいた組織として形成されるようになったからです。歯科医学知識と治療技術を有する歯科医師と、保健衛生指導の技能者である歯科衛生士が、それぞれ「治療」と「予防」という両輪を分担して動かしていく「健康と美を創造する組織」が、新しい歯科医院ではないでしょうか。